

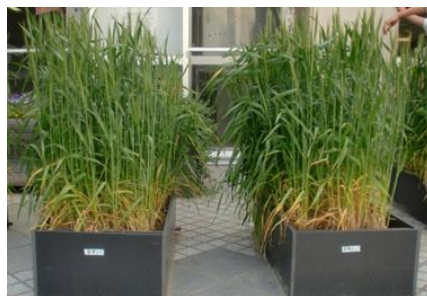
第四期

200パーセント自給率小麦
「ゆめちから」栽培プロジェクト

山梨県甲府第一高等学校

SGH小麦班

活動の成果



研究テーマ

耕作放棄地で小麦をつくろう！



目的

より少ない肥料で
収穫量が多く、
質の良い小麦を栽培する



仮説

◎ 肥料の量の調整

基肥



少量

起生期

止葉期



多量



栄養が穂にいきわたる



施肥計画とその理由

	基肥 (g)	起生期 (g)	止葉期 (g)	合計 (g)
基準区	10	18	12	40
研究区	3	15	32	50

● **基肥**と**起生期**の肥料は少なく、
止葉期の肥料は多く設定

→ 基肥を少なく育てたほうが、**より成長**していた(過去のデータ)

→ 止葉期に追肥をすると**穂が大きくなり**、
品質が向上することに使われるのでは？と考えたから

栽培条件

- **場所: 学校の中庭**
- **播種時期: 10月18日**
- **日当たり: プランターごとに偏りがあった**



西

職員室一階建

基準区①

基準区②

基準区③

研究区①

研究区②

研究区③

調査区

教室棟
4階建

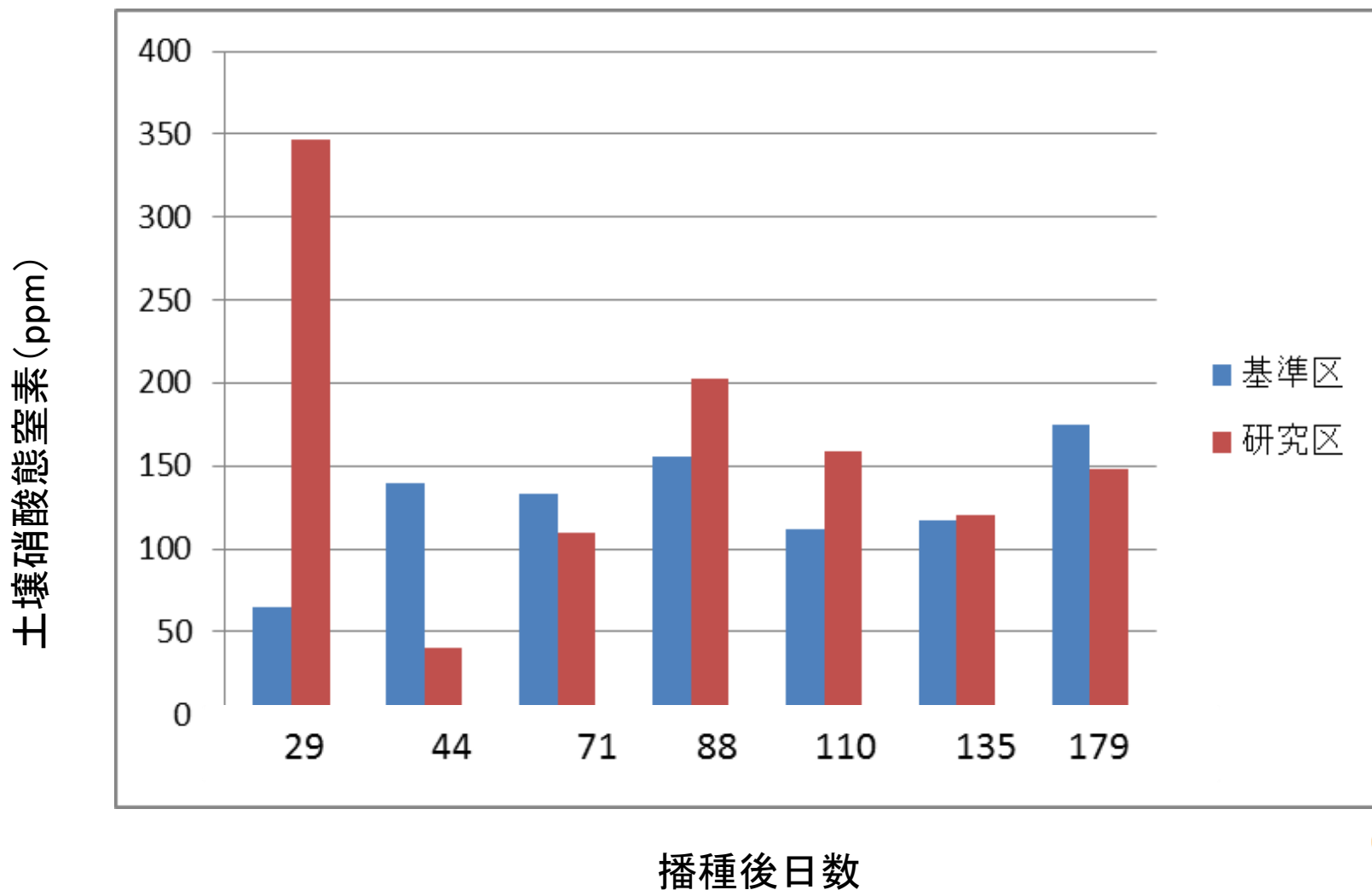
南

小麦プランター配置図

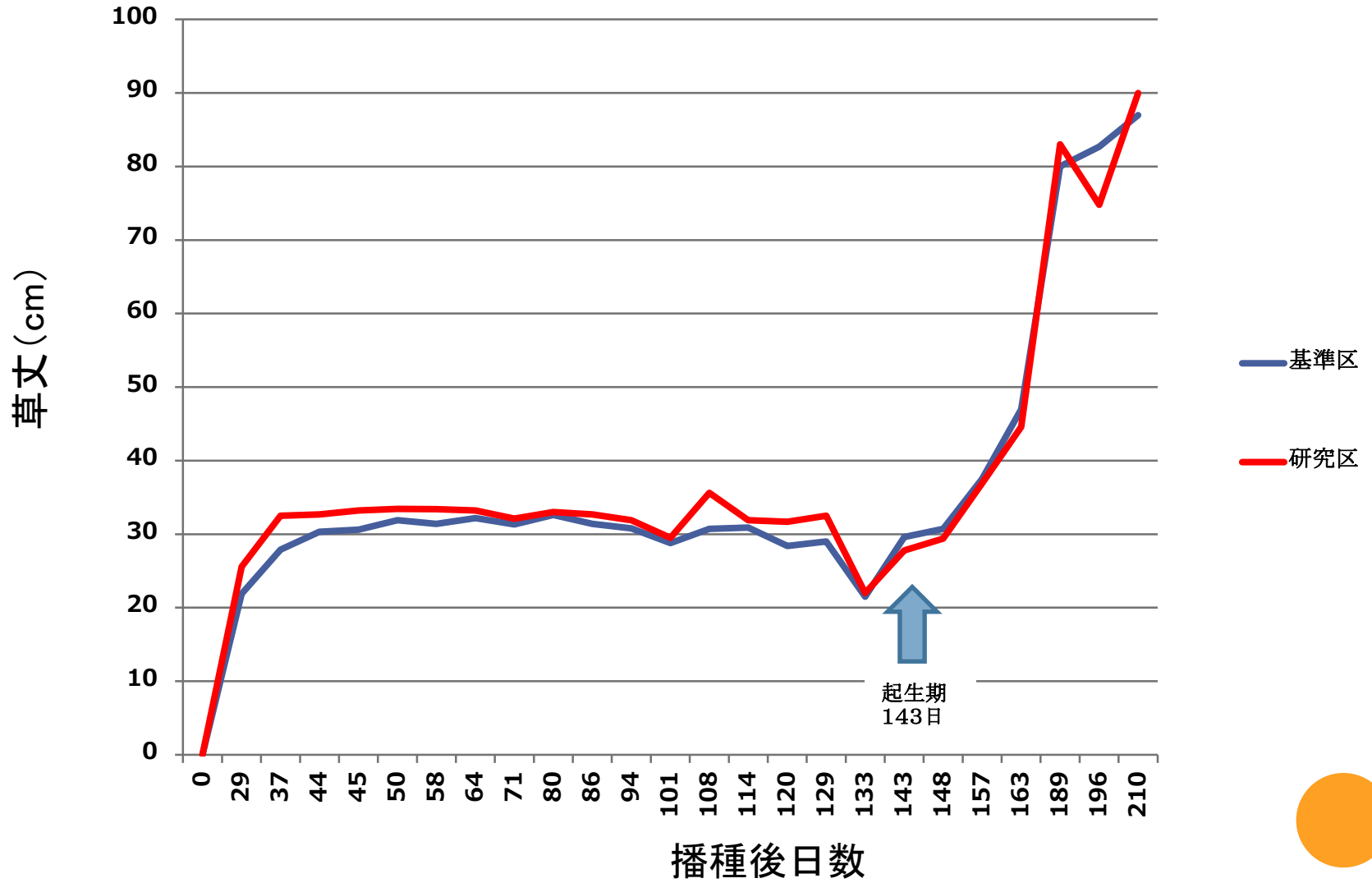


栽培結果①

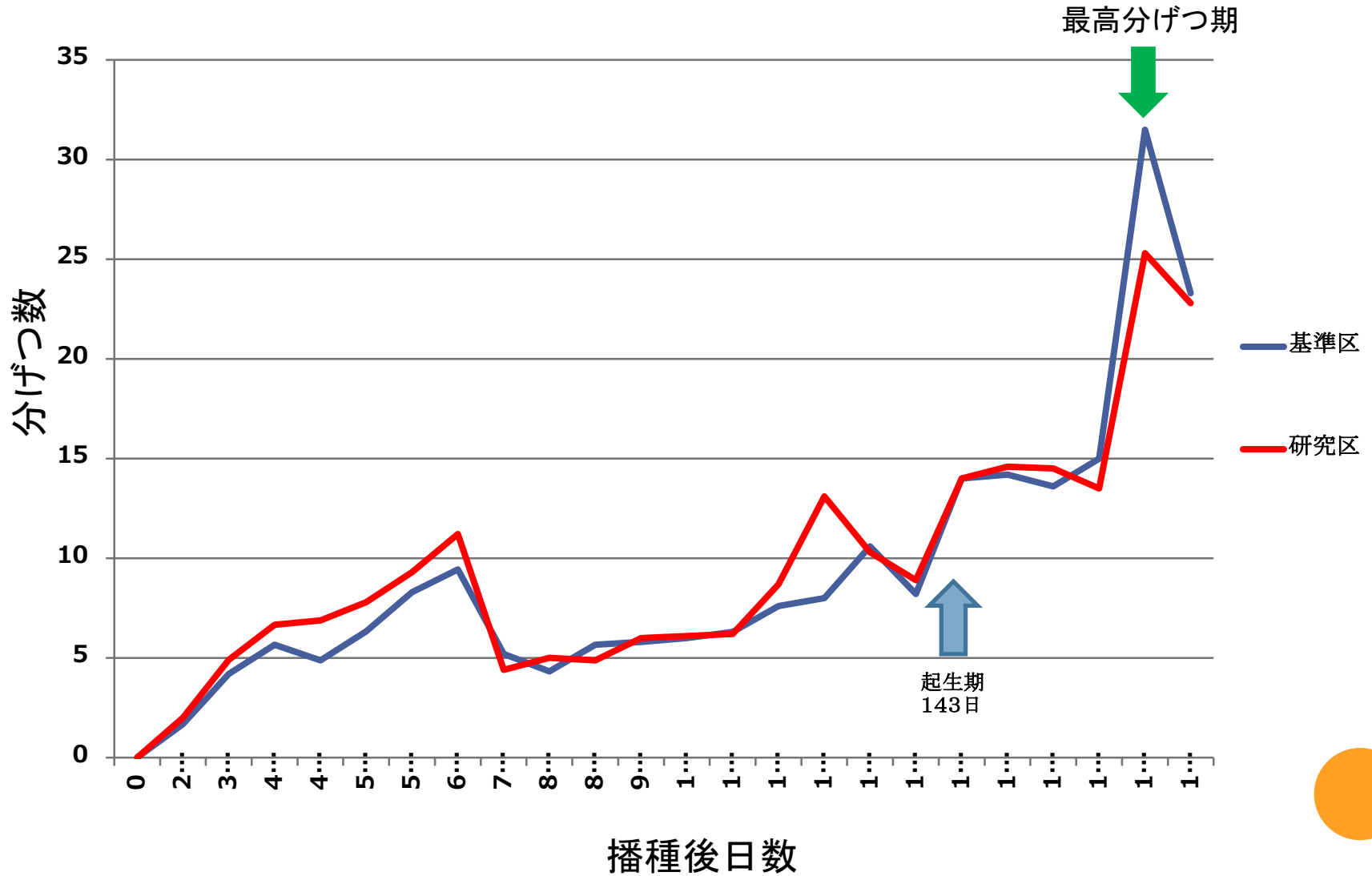
土壤窒素量



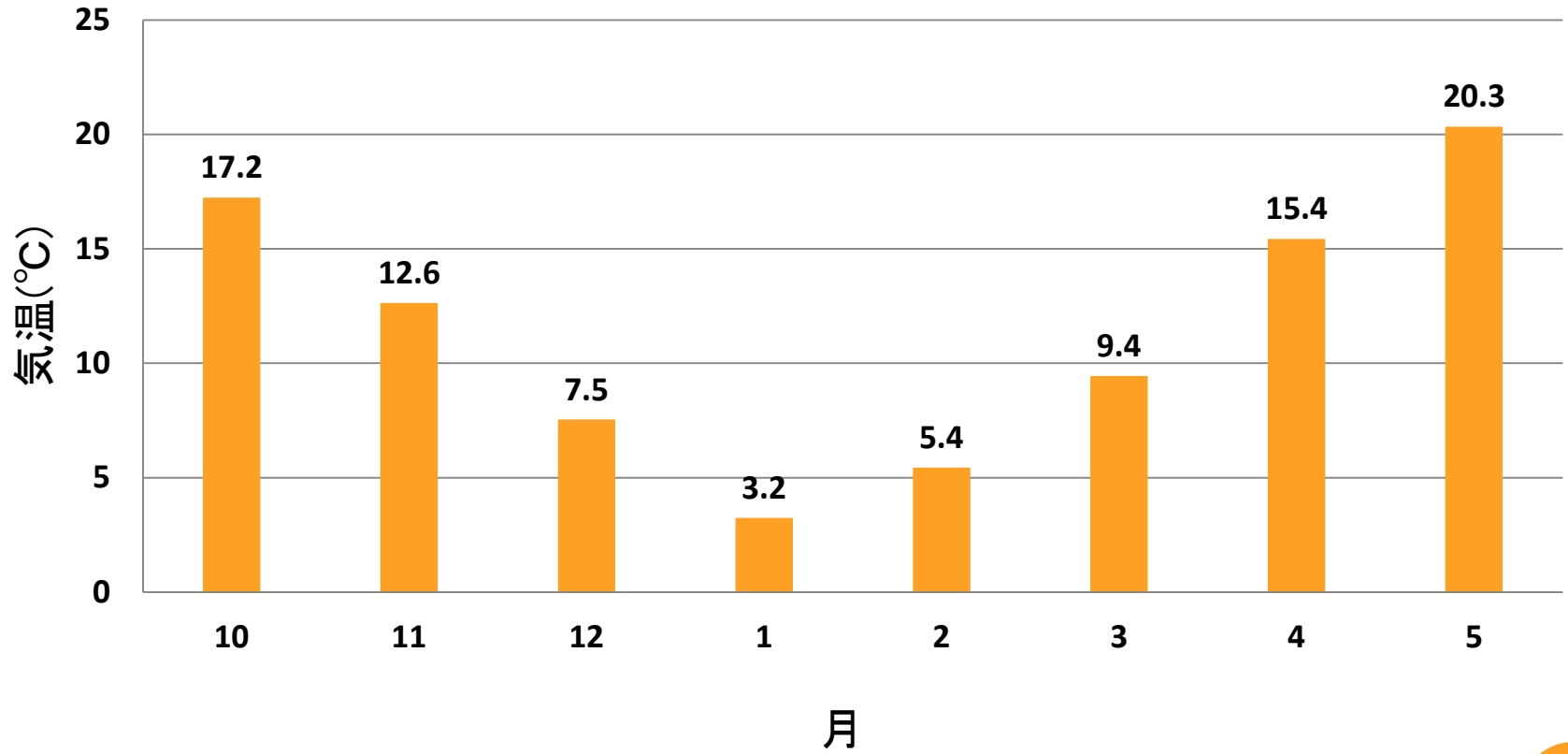
播種後日数と草丈



栽培日数と 分けつ数



月平均气温



栽培結果②

	研究区1	研究区2	研究区3	基準区1	基準区2	基準区3	調査区
穂数	203	184	194	220	198	218	196
1000粒 (g)	39.68	40.17	42.01	31.88	29.03	27.63	

収穫した穂の数
(穂数は各プランターごと)



分析結果

全重量平均

基準区:119g

研究区:198g

粉重量平均

基準区:64g

研究区:121g

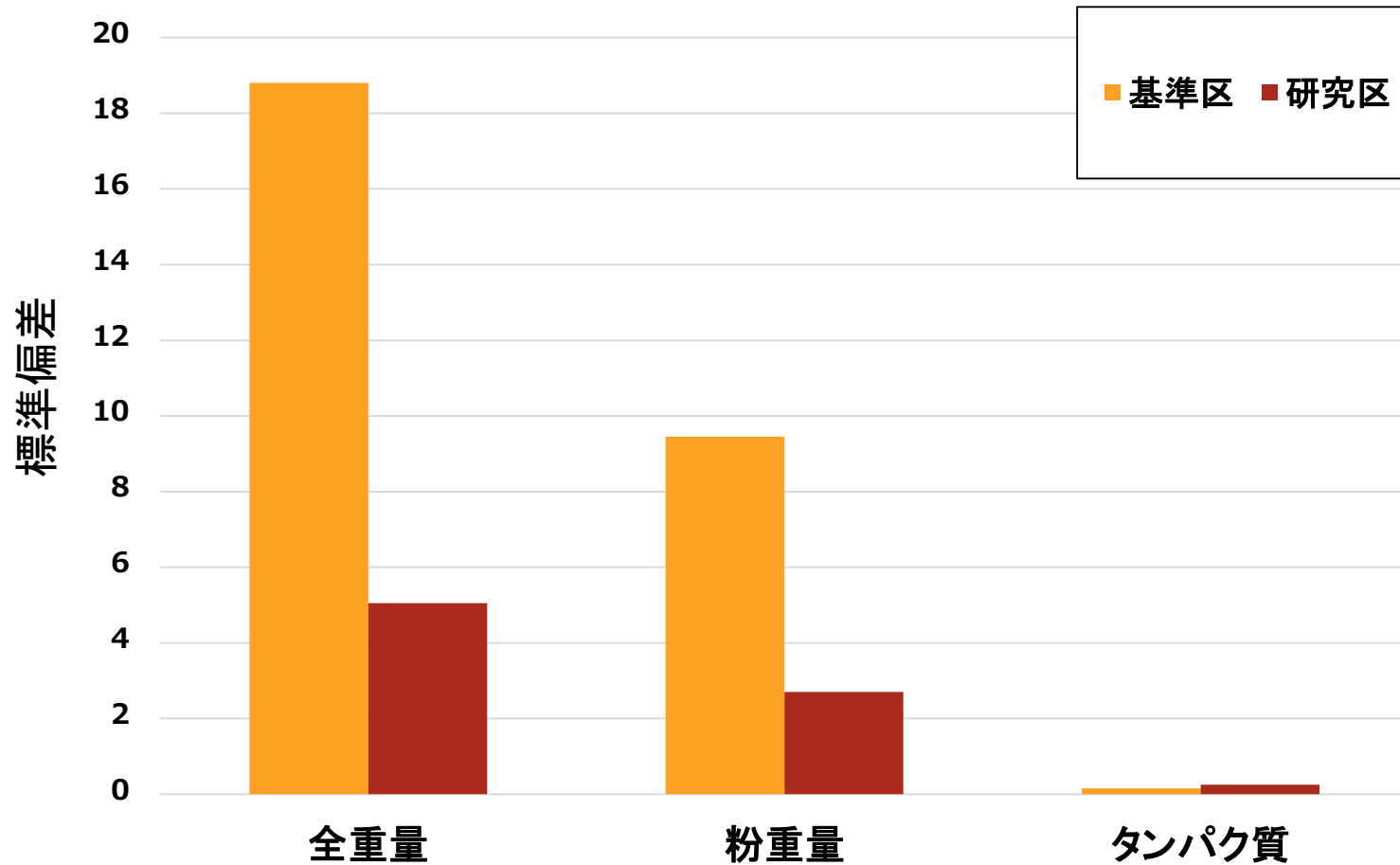
製粉歩留

基準区:57g

研究区:63g

サンプル名	全重量 (g)	粉重量 (g)	ふすま重量 (g)	製粉歩留 (g)	タンパク質含量 (g)
基準区1	92.5	53.4	35.4	60.1	16.9
基準区2	131.0	67.5	59.4	53.2	17.1
基準区3	130.1	72.3	52.8	57.8	16.6
研究区1	198.0	121.7	71.2	63.1	16.4
研究区2	188.1	114.6	68.3	62.7	17.7
研究区3	208.1	127.1	74.5	63.0	16.9
調査区	273.4	165.7	101.3	62.1	15.5

分析値の比較



栽培結果②まとめ

- 穂数：**基準区**のほうが多かった
- 1000粒あたりの重量：**研究区**のほうが多かった。

→ 研究区は基準区と比べて、穂の数は少ないが一粒が大きい。



- 全重量：**研究区**のほうが多い
- 粉重量：**研究区**のほうが多い

→研究区は基準区と比べて、
収穫量が多い。



○製粉歩留：**研究区**のほうが値が高い

→研究区は基準区と比べて、
製粉に適している

○タンパク質含有量：あまり変わらない



つまり…

研究区の小麦は、
収穫量が多く、**質**の良い、
より製粉に適した小麦である



考察①

○止葉期の追肥は穂の粒を大きくす

るしかし、タンパク質含有量や穂の数には影響しない。



考察②

○プランターごとの日照時間の差が、収穫量などの結果に影響した。



つまり…

研究区の小麦は、
収穫量が多く、**質**の良い、
より製粉に適した小麦である



課題



早めにアブラムシ駆除をする



効果的なアブラムシ駆除



窒素測定を正確に行う



タンパク質含有量を上げる



来年度にむけて

- 耕作放棄地の土を使い、学校のプランターで栽培する
- タンパク質含有量をも上げる

